

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第10回

クルマ社会イタリアの運転事情

立元 義弘

現在では殆どがフィアットの傘下に入っていました。自動車産業はイタリアの基幹産業のひとつです。パンダ、プントといったフィアットブランドの大衆車から、アルファロメオ、ランチア、マセラティ、更にはフェッラーリ、ランボルギーニといったクルマ好きなら一度はそのコックピットに座るだけでもと思うスーパーカーに至るまで、ピンからキリまで様々なクルマが作られています。

いう勘定になり、北西部の小州、ヴァッレ・ダオスタ州などは1000人あたり1052台と、もう一体どういことになっているのかわからないほどです。

クルマを買う時にも日本の車庫証明のような手続きはなく、また、歴史的建造物の多い街中では立体駐車場や地下パーキングをどんどん作る訳にもゆかないからでしょうが、一斉に路上駐車が消える夏のヴァカンスシーズンを除けば、大都市ではいつも街全体が駐車場といった状態です。ちょっとした合間なら二重駐車は日常茶飯事、道路によっては道の両端どころかセンターラインに沿ったゾーンまでが駐車列になることもあります。



【人口千人あたりの自家用車数】

Fonte: ISTAT、総務省統計局より】

そうしたこともあってか、イタリアは世界でも有数のクルマ社会で、通勤もヴァカンスも7割以上のイタリア人がマイカーを使います。人口1000人あたりの乗用車の保有台数は605台と、ルクセンブルクに次ぐ世界で2番目の国で、日本のほぼ倍です(図表)。言い換えると、老人や赤ん坊も計算に入れたイタリア人老若男女の5人に3台と



【イタリア名物 縦列駐車 & 二重駐車】

こうしたクルマ社会のイタリアですが、運転マナーは決して良いとは言えません。自分の運転技術に対する自信の裏付けか、俺が交通ルールだと言わんばかりの自己中心的運転、これが言い過ぎなら交通ルールに対して非常にフレキシブル

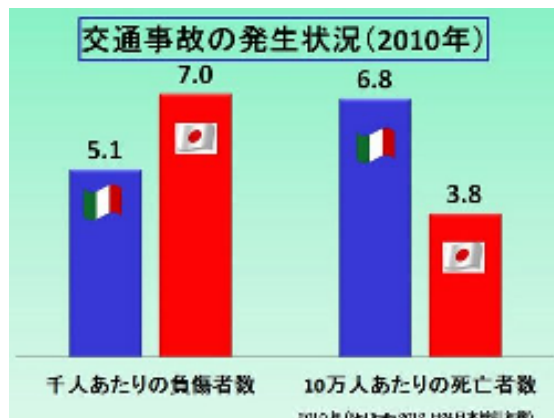
な運転のドライバーが多いので、前を走る車が方向指示器を出しているからといってその通りに曲がるものと信じて運転することは禁物ですし、交通渋滞の度合いに応じてドライバーたちが誰からともなく“自主的”に2車線道路を3車線に変えてしまったりもします。そして、このフレキシビリティの度合いは南部に行けば行くほど強くなるようです。

ナポリへクルマでヴァカンス旅行に出かけた際のこと、市内観光は公共交通機関を使うつもりだったのですが、生憎のストで市内の移動もクルマを使わざるを得なくなりました。こうなったら仕方がないとおっかなびっくりで走り出しはしたものの、一方通行の道路で前から来るはずのないクルマは来るわ、赤信号で止まっても横切るクルマの交通がなければ後ろからクラクションで煽られるわで、ダラダラと冷や汗を流しながら運転する羽目になったことを思い出します。ナポリでは赤信号にもいろいろ種類があるとかで、例えば、rosso discutibile(議論の余地のある赤)とか、non proprio rosso(真っ赤ではない赤)といったものがあるそうです。それを知らない俄か仕立ての東洋人ナポリタンドライバーが、いきなりこの交通環境に飛び込むのは相当に無謀なことであったようです。

こうしたイタリア人の運転マナーからすると、さぞかし交通事故も多いのではと思いますが、2010年の交通事故による死亡者数は4090人、負傷者数は30万3千人で、その数は年々減少中です。日本と比べてみますと、人口千人あたりの交通事故による負傷者数は日本が7.0人、イタリアが5.1人で、(意外なことに)イタリアの方が少なくなっています。一方、死亡者数は、人口10万人あたり日本が3.8人、イタリアが6.8人で、こちらはイタリアの方がかなり高く、一旦事故が起こると重大事故につながることが多いということが言えそうです(図表)。今までは大目に見られてきた飲酒運転も、最近の道交法改正により、サービスエリアでの酒類販売規制が強化されたり、全てのレストランにセルフチェック用のアルコール濃度測定器の設置が義務付けられたりしていますが、それでも飲酒や麻薬服用の揚句のひき逃げといった悪質な事件もしばしば起こっています。

蛇足ですが、州都にジェノバを持つリグリア州

は、登録車両あたりの交通事故の発生件数としては1000台あたり5.2件と全国平均の4.3件よりずいぶん高いのですが、死亡者数は10万人あたり5.2人と全国最低レベルです。クロワッサンの形をした、山が地中海ぎりぎりまで迫る、平地の少ない地形が、事故は起きやすいけれども皆が注意して運転するので大事故にはなりにくいということにつながっている気がします。



【日伊交通事故状況 2010 年

(Noi Italia 2012, H24 日本統計年鑑)より

次は自動車泥棒についての話です。

私もミラノ在住時、家にガレージがなくやむなく路上駐車をしていた時期があるのですが、毎日同じ場所が空いているわけではないので日によってとめる場所が変わります。都合で遅くに帰宅した翌朝などは、昨晚クルマをとめた(と思い込んでいる)場所に愛車の姿が見あたらず、すわ遂に盗まれたかとドキッとしたことが何度かありますが、一昔前までの盗難対策と言えば、ハンドルに鍵付きチェーンをぐるぐると巻きつけたり、ハンドルとクラッチをこれも鍵付きの鉄棒で固定したりするものでした(次頁写真)。現在は殆どが電子式の防犯アラームに代わりましたが、ただ難は、これがよく誤動作することで、夜中の夕立で雷がゴロゴロときたりすると、一斉にあたりの路上駐車車のクルマのアラームが鳴りだし、安眠妨害という迷惑を蒙ることがしばしばあります。

クルマ社会のイタリアは泥棒さんにとってもよいマーケットらしく、防犯アラームは必需品ですが、統計でみてみると、2010年の1年間で12万4千台のクルマが盗難にあっており、これは日本の5倍の発生頻度です。即ち、1日に340台、1時間

に14台のクルマがイタリアのどこかで盗難にあっている勘定で、やはり大都市での発生件数も多く、ローマ、ナポリ、ミラノで全体の4割が発生しています。そして、盗まれたクルマが再び見つかるのは半数以下と低く、イタリアでは一旦盗難にあうと愛車が無事に手元に戻ってくることはあまり期待できません。どうやら高級車の場合は車種指定の“受注ベース”で狙われたクルマが海外へ“輸出”されたり、また、大衆車の場合は解体されて中古補修パーツ市場に流れて行ったりするようですが、いずれにしても組織的窃盗団の暗躍によるものなのでしょう。中には修理やメンテナンスから帰ってきたばかりの高級車が狙われることもあって、この場合は修理工場で不正にコピーされた鍵やアラーム解除キーを使っての犯行によるものであり、もちろん修理工場内部に共犯者がいるということになります。



【今は見なくなった一昔前の盗難対策器具】

最後に、もし皆さんがイタリアで運転することになった時に、是非覚えておいてほしいことをいくつかご紹介しましょう。一つ目は、日本のクルマと比べてワイパーとウィンカーのレバーが左右逆についていることです。右側通行、左ハンドルに慣れるまでは緊張するものですが、ついそちらの方に気を取られ、方向指示器を出したつもりが目の前でワイパーがゴシゴシ、余計に焦ってしまうという

経験が私にもあります。二つ目は駐車の方法。路上駐車が多いイタリアでは縦列駐車は必須の技術です。また、パーキングにクルマをとめる場合も、なぜかイタリアでは殆どが頭を先に入れる前向き駐車です。出る時のことを考えたら多少面倒でもバックで入れておいた方が楽なのにと我々日本人は思ってしまうのですが、これは周囲への排ガス対策ではもちろんありません。三つめは街を走るクルマのほとんどがまだマニュアル車だということです。高級車などは段々とオートマ車が主流になってきていますが、全体ではまだ9割がマニュアル車です。燃費や価格に対する先入観のせいなのか、それともマニュアル車でないとクルマではないという意識が未だに根強くあるためなのか、理由は定かではありませんが、縦列駐車と並んでマニュアル車の運転はイタリアでは必須の技術です。そして、最後が給油の際の燃料。日本語ではガソリンだからとガソリーオ(gasolio)を入れてしまうと、もしあなたの運転するクルマがディーゼル車でなければエンストしてしまうことになります。ガソリン車の燃料はベンジーナ(benzina)と言いますから、ガソリン車にはこちらを給油しなければなりません。最近ではセルフサービスのガソリンスタンドも多いので、うっかり間違えて路上で立往生なんてことにならないように気を付けましょう。

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

イタリア 発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

イタリア通信

第9回『Estate』

-空になる季節-

深草 真由子

イタリアに夏が訪れるのは早い。冬の間ずっと灰色がかった空も、四月になると太陽がのぞいて明るい水色に変わり、そして五月にはもう真っ青に。雲一つない晴天が毎日のように続き、気温はうなぎ昇り。屋外で少し体を動かすだけでも上着を脱ぎたくなり、サングラスなしではいられないくらいに日差しが強くなる。海好きな人は週末になると、さっそく砂浜に日光浴に出かける。バールの一角にジェラートが並び始めるのもこの頃か。南北に長いイタリアのことだから地域によって差はあるにしても、日本のように梅雨がない分、「あっ」という間に春から夏へと移り変わってしまうような気がする。

夏の気配を早々と感じさせられるのは、何も天候によってだけではない。「イタリアでは時間が穏やかに流れる」「イタリア人は時間をゆったりと過ごす」などと言われていることは確かに真実で、通勤時間帯の日本のサラリーマンのように早歩きする人は、ミラノのような大都市でもあまり見かけない。しかし夏へと向かうこの時期だけは、イタリア人は皆なぜかいつも急かされているようで、どこことなくそわそわしている。パスクア(復活祭。春分後最初の満月の後の日曜日に祝われ、年ごとに日付は変わる。今年四月八日であった)前後にある一週間ほどの春休みに友人たちが集まれば、そこで話題になるのはマンマが作ったパスクアのごちそうと、夏休みの予定。「夏はどうするの?」「どこに行くか、もう決めた?」と質問すれば、チケットや宿の予約はまだだとしても旅の行き先は決まっていたり、家族や友達との間でもうすでにボンヤリとしたプログラムがあったりするので驚きだ。まだ三、四カ月も先の話なのに。イタリア人、(ヴァカンスのことについては)なんて気が早いのだろう!

五月や六月になれば、お店のショーウィンドーには水着やサンドレスが並ぶ。赤や黄色、ビビッ

ドピンクや水色、あるいは真っ白か真っ黒、茶色など、どれもこれも小麦色に焼けた肌にしっとりくる色合いのものばかり。一年間続いたテレビ番組も夏の間は中断されるので、ヴァカンス中に読むべき本などを紹介して最終回を迎えるのもこの頃である。そしてもしも病気や虫歯がある場合は、この時期に治療してしまわなければいけない。町の医者には早々とヴァカンスに行ってしまうからである。



【羊小屋からやってくる犬たちとサンベッド】

Vacanza という語が「空(から)である」という意味の形容詞 vacante に由来していることからすると、自分自身を取り戻すために、日常のストレスから解放されて「空」になることがヴァカンスの本来の目的なのだろう。そうであれば、(たとえ心はそれで充足したとしても)都市の観光スポットを巡り歩いて、道路のセメントから立ち上る熱で肉体を酷使するよりも、海や山のような比較的気温の低い場所に行き、サンベッドに寝転がって本を読んだり、家族や友人とおしゃべりを楽しんだりして心身ともにリラックスするのが、正しいヴァカンスの過ごし方なのだろう。まさに多くのイタリア人が実践していることである。ねっとりとした汗をかきながら体に鞭打って働き、エアコンの冷風でなんとか生気を取り戻す、そんな日本の夏とは違う。「都会は蒸し暑いから、風の通る田舎へ行こう」「もっとも気温が上がる屋下がりは、ひと眠りしよう」「朝や夕方涼しい時間帯にだけ活動しよう」。人間も自然の一部だから、自然をあるがままに受け入れ、自然の都合に合わせて生きる—イタリア人のシンプルでスローな暮らし方は健全であり、究極のエコでもある。すばらしい。

「すばらしい!」と言えば、イタリア人が山や海

辺に所有しているセカンドハウス。ごくごく普通の庶民が別荘を持っていても決して驚かないほどに、セカンドハウスの所有率は高い。そして多くの都会の家と同様、そこにも広い居間や客人用の寝室があり、家族だけではなく親戚や友人、隣人が集まって、気楽に和やかに時を過ごしている。このように、夏は都会を離れ、田舎にある家族の持ち家や、あるいは週単位で借りることのできるペンションに滞在して、特別なことは何もせずに、ひたすらリラックス—これが、イタリアの人々が一年中待ち焦がれているヴァカンスである。筆者自身もありがたいことに、イタリア中部にある田舎の別荘での歓待に預かっている。“I Borghi più Belli d’Italia(イタリアで最も美しい村)”の一つに認定されている村落の、湖の対岸にある木造のコテージ風の家に泊めていただき、道端でジャム用のブラックベリーを摘んだり、かまどで手作りピザやサルシッチャを焼いて食べたり、牧羊犬や野良猫に餌をやったりして過ごしている。なんでもないことだが、ヴァカンスでもないとなかなかできない。午前中や夕方には村の中心に位置する広場に皆が集まる習慣がある。普段はローマなどの大都市に住んでいて、夏休みだけこの村の実家に戻ってくる人が多いので、彼らにとっても、久々に幼馴染と一緒に過ごす特別な時間である。お喋りを楽しんでいる人、ベンチに座って新聞を読んでいる人、駆けまわったり、自転車に乗る練習をしたりする子供、居眠りしている老人。老いも若きも皆一つの大家族のようで、フェッリーニの『アマルコルド』の中にもぐり込んだような、タイムスリップしたような気分になる。然るべき時間に然るべき場所に行けば知り合いに会うことができる、そんなコミュニティをもっているイタリア人は幸せだ。

イタリア的ヴァカンスとは言えないにしても、国内やヨーロッパの観光都市を巡り歩くことを好む人たちもやはり多い。この夏のイタリア観光の目玉の一つとしては、四月末に運行が開始された高速列車“イタロ”があるだろう。“イタロ”とはフェッラーリの会長で、政界進出が噂されるモンテゼーモロ氏も出資している民間会社の列車で、その車体はワインのような赤色。内装はイタルデザイン・ジウジアーロによるもので、大きく快適な革製の座席、インターネット使い放題、さらに座席の前のモニターで映画鑑賞もできると宣伝されている。イ

タリア国鉄が所有している線路を走り、現在はミラノ、ポローニャ、フィレンツェ、ローマ、ナポリの大都市を一日二往復するのみだが、将来的には東西はトリノ、ヴェネツィアまで、南はサレルノまで拡張するようだ。イタロについては、鉄道好きではなくても観光客にとっては興味深いニュースとして、日本で報道された。しかし、どうだろう？ 普通のイタリア人にとっては、高速鉄道などはむしろ無縁であり、彼らの日常生活に密着したローカル列車や中距離間を結ぶ列車の便数を増やしてほしいというのが彼らの本音ではないだろうか。とりわけここ数年は、インテルシティやレジョナーレ、夜行列車など、従来からあった電車の運行数が激減した。そのため、フィレンツェ・ポローニャ間のようにレジョナーレでも一時間程度で到着する距離を旅行する場合でも、ユーロスターに乗らざるをえないことがしばしば。そしてユーロスターに乗ったとしても所要時間はレジョナーレに乗った場合とほぼ変わらないのに、料金は数倍高い。



【豪華客船の座礁で知られた、ジリオ島でのヴァカンス】

先日、劇作家で役者でもあるマルコ・パオリーニが Treno というタイトルのモノローグの中で、彼

が若い頃好きでよく乗っていた夜行列車による、ある夏の旅の思い出を語っていた。暗闇で静寂の中を走るからこそ余計に感じられる列車のクランクの匂い。そこに、停車するたびに窓の外から入ってくる空気の匂いが加わる。それは駅ごとに違う。乾燥した石炭の匂い、湿った苔の匂い、線路の間に生えた雑草の匂い…。電車にエアコンが付き、窓を開けることができなくなった今では、海岸線を走っていても潮の香りを感じることはなくなった。車窓というスクリーンに映し出された風景を、まるで映像のように眺めるのが関の山。しかしそんな虚像では満足できないイタリアの人々は潮風を、そして水と太陽のエネルギーを体感しようと、スクリーンの向こう側に降りてゆくのが好きである。なぜなら、あるがままの自然の中でこそ、自分自身も素の状態“vacante”に戻るこ

とができるのだから。



【イタリアで二番目に大きな湖、マジョーレ湖】

(元当館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

標準イタリア語の“戸惑い”

《イタリア語の父》ダンテの言語がイタリアの標準語とされるに至るプロセスは、言うまでもなくその後の長い期間にわたっていますが、初期ルネサンス時代のイタリアにあつては、ラテン語、フィレンツェ語、ミラノ語など多くの言語が用いられ、それらは分野に応じて使い分けられながら併存していたのです。

唯一の言語“イタリア語”ですべてが表現されるようになる以前の状況を、ハーバード大学ルネサンス研究所およびライラ・アチソン・ウォレス基金の支援を得て来日するメルボルン大学アンドレア・リッツィ博士が、分かり易く解説します。

日時:6/9 (土)16:30~18:30
会場:日本イタリア京都會館 本校
参加費:

個人維持会員:500円

一般・受講生:1,500円

講師:アンドレア・リッツィ(メルボルン大学)

古代ローマの入浴文化

現在、話題沸騰の映画『テルマエ・ロマエ』に描かれているように、古代ローマ文明は高度な入浴文化を発展させました。

本講演では、実際にポンペイ遺跡を初め様々な古代ローマ遺跡を発掘・調査された同志社大学講師・坂井聰先生をお招きし、遺跡に残された公共浴場の跡を紹介、その豊かな生活に触れると共に、浴場文化を支えたローマの水道というインフラについても解説していただきます。

日時:6/16 (土)17:00~19:00

6/16の会場:日本イタリア京都會館
大阪梅田校

日時:6/23 (土)16:00~18:00

6/23の会場:日本イタリア京都會館
京都本校

※大阪、京都とも同内容です
参加費:

個人維持会員:500円

一般・受講生:1,500円

講師:坂井 聰(同志社大学講師)

カンツォーネ講習会

1950年代に日本でも愛唱された「さらば恋人よ(チャオ・ベッラ・チャオ)や映画「ブラザーサン シスタームーン」からのドルチェ・センチーレの他ナポリ民謡と色々なイタリアの歌を取り上げます。

みんなで楽しく歌うことが目的なのでお気軽にご参加ください。初めての方も大歓迎です!

日時:6/ 8 (金)14:00~16:00

6/15 (金)14:00~16:00

会場:日本イタリア京都會館 本校
参加費:

2回分一括 個人維持会員 4,000円

受講生・一般 5,000円

1回分 個人維持会員 2,500円

受講生・一般 3,000円

講師:山本 隆子(ソプラノ歌手),北村 麻也子(ピアノ伴奏)

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都會館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/